

大島襄二・浮田典良・佐々木高明 編著：

『文化地理学』

古今書院 1989年11月

A 5判 408ページ 6,695円

本書は、日本においてまだ十分に定着しているとはいえない文化地理学に対して、真正面から取り組み、開拓しようとする本格的な編著である。編集代表者である大島は、アメリカで発展するものが日本でも流行する傾向が強い学問の一般の傾向の中で、文化地理学のみが例外であるとの認識のもとに、本書を地理学界を誘導する書としてよりも、問題を提起する書として公刊したとの意図を「はしがき」において述べているが、その編者のねらいは、16人による意欲的な執筆に裏打ちされて、本書に一貫して現れている。

編者たちは、本書を学説史に関する部分、環境や適応に関する部分、生活・行動に関する部分に分け、それぞれに研究実績を持つ研究者、主として若手研究員に執筆を依頼し、編集した。本書の構成と執筆担当は、以下の通りである。

I. 文化地理学の系譜（大島襄二編）

1. 文化地理学学説史（久武哲也）
2. 文化地理学と文化人類学（端信行）
3. 文化地理学と日本民俗学（八木康幸）
4. 環境と認識（松本博之）

II. 生業の文化地理（佐々木高明編）

1. 山地の文化地理（高山龍三）
2. 作物の文化地理（小林茂）
3. 漁業の文化地理をめぐって（田和正孝）
4. 船の文化地理（出口晶子）

III. 居住・行動の文化地理（浮田典良編）

1. すまいの文化地理（杉本尚次）
2. 村落の文化地理（山野正彦）
3. 市の文化地理（石原潤）
4. 複合社会の文化地理（瀬川真平・石塚道子）

終章. 文化地理学の展望（大島襄二）

第1章は、本書の中心ともなるべき章である。編者も述べているとおり、「文化地理学とは何か？」を考えるためには、「なぜ」こういう名称の学問が生まれ、「何を」その内容としたのか、という経緯を追求する必要がある、その点では、文化地理学の学説史そのものが、文化地理学の本論ともいえるべき性格を備えている。

文化地理学学説史を概説した第1節は、ドイツとアメリカの文化地理学、とくにサウアーとパークレー学派を中心に、その成立と展開を様々な歴史的背景とともに述べた優れた論稿であり、文化地理学を理解するためには必読の節であろう。しかし、多くの内容を限られた枚数に収めたために、関連知識のない初学者や学生には、理解が困難な点が多いと思われることが残念であり、同著者によって、よりわかりやすく展開した概説書が公刊されることが、日本における文化地理学の発展に大きく寄与するものと思われる。文化人類学や日本民俗学との関連をまとめた第2、3節は、地理学界以外からの影響を大きく受けてきた統合的な学問としての文化地理学を理解する上で非常に役立つレビューである。なかでも、日本民俗学との接点を求めながら地理学を発展させてきた先学の業績をまとめ、今後の方向性を示唆した第3節は、ともすれば欧米の流れに無批判に追従しようとする風潮に警鐘を与え、日本独自の文化地理学の発展を模索していく上で重要な役割を果たすであろう。第4節は、第1章の他節とは趣向が異なり、文化地理学全般にわたるレビューというよりは、様々な文化地理学のテーマのうち環境の認識という対象に絞り、多岐にわたる諸アプローチのうち、生態学的、人間主義的アプローチを選択し、論述した試論であり、今後の文化地理学の方向性の一事例を提示したものと意義あるものと考えられる。

第1章を文化地理学の総論とすれば、第2章と第3章はその各論にあたる。第2章では生業が、第3章では居住・行動がとりあげられているが、それらによって文化地理学のトピックを体系的に網羅しようとしたものではない。読者によっては、従来文化地理学プロバターの研究分野と考えられてきた言語や宗教が含まれていないことに疑問を持つかもしれないが、編者の意図は、文化地理学を単なるトピックとして捉えるのではなく、文化地理学的視点によって従来の地理学の対象にアプローチしようとするものであり、そこにこそ本書の革新性があると思われる。第2章の編者は、環境に適応して文化的特性を形成するうえで核心的な役割を演ずるものとして生業を位置づけ、生業が自然に順応、改変、不均衡する形態の異同を地域ごとに比較研究することが、文化地理学にとって最も重要な課題であるとの立場をとっている。また、第3章では、行動を、西ドイツ

社会地理学で用いられている「基本的生活行動」の概念が示す、①居住する、②労働する、③供給を受ける、④教育を受ける、⑤余暇を楽しむとみなし、そのうち、とりあえず①、②、③をいかに文化地理学的にアプローチできるかを、すまい、村落、市、複合社会というトピックで試み、④、⑤へのアプローチを今後の課題として残した。

この第2、3章に収録されている個々の論文の性質は様々であり、従来の研究を展望し、今後のあり方を模索したもの(Ⅱ-3、Ⅱ-4、Ⅲ-1、Ⅲ-3、Ⅲ-4)ばかりではなく、オリジナルな事例を文化地理学的視点をもとに展開しようとしたもの(Ⅱ-1、Ⅱ-2、Ⅲ-2)も存在する。また、文化地理学的視点をどのように捉えるかという立場も筆者によって異なり、文化生態学的な検討を行ったもの(Ⅱ-1、Ⅱ-2、Ⅱ-3)、文化領域、文化の起源と伝播という問題を扱ったもの(Ⅱ-4、Ⅲ-1)、社会構造に与える文化的規範の意義を提唱したもの(Ⅲ-3)のように比較的伝統的な立場もあれば、景観に刻印された意味と価値(Ⅲ-2)や、象徴体系やイデオロギーの空間的側面(Ⅲ-4)を扱った新しいアプローチもみられる。読者は、文化地理学的視点とはこれであるという即席の答えを得ようとして各論文を読むのではなく、むしろ大島が述べているとおり、構成された各論文のトータルな姿において、日本における文化地理学そのものを考える手がかりとするべきであろう。

以上のような論文を受けて終章では、大島自身が日本の文化地理学の展望を行っている。日本において文化地理学が確立されてこなかった理由の一つとして、野外調査を基とする先駆的な文化地理学的研究が、地理学者よりも文化人類学や民俗学で評価され、閉鎖的な地理学界にあきたらない研究者たちが、隣接学問に安住の地を見いだしてきたことがあげられているが、それは、長く文化地理学者として歩んできた編集代表者が実感してきた悲しむべき事実であろう。その状況を踏まえつつ、大島は、文化伝播

や文化統合を隣接学問との協力のもとに構築されるべきテーマとみなし、文化地理学独自の対象から捨象し、日本の地理学において概念の整理がなされている「景観・生態・地域」を文化地理学の3つの柱として提起している。そして、さらに日本では文化概念が曖昧であることや、異文化体験が少ないことが文化地理学発展の阻害条件であったというのはいわげにすぎず、確固たる方向付け、理論づけがないことこそ本質的問題であると、日本の現状を鋭く指摘している。この終章からは、日本の地理学界の中で、文化地理学の間を確立しなければならないという編者の熱意が、とくに強く伝わってくる。

従来、日本の文化地理学の遅れに関する指摘はいくつか行われてきたが、本書のように、批判ばかりでなく、実際に方向づけを示し、その具体例をも掲載した本格的な著書はほとんどなく、その意味で本書は日本地理学界において画期的な業績であろう。全体を通して、執筆の間で文化地理学に対する意見の一致が少ないことは確かに問題であるともいえるが、これから文化地理学が確立されようとする現時点において、このような様々な立場が一度に紹介されたことは有意義なことであろう。本書の評価は、本書自体の一貫性や完全性に負うのではなく、むしろ、本書が今後どのような批判や代案を喚起するかによって正当に判断されるように思われる。かつて1962年にマイクセルとともに「文化地理学リーディング」を編集し、その中で文化地理学の5つのテーマを提唱したワーグナーは、1975年の論文において、すべての文化地理学者たちが無批判にその5つのテーマを受け入れ、何の批判も行わなかったことを嘆いているが、このワーグナーの嘆きが本書において繰り返されないことが、編者たちの切なる願いであろう。ややもすれば論争を避ける傾向が強い日本の学界の中で、批判を受けることを目的に問題を提起した編者や執筆者たちに、最大の賛辞を送り、本書の公刊を契機に、活発な議論が行われることを望みたい。(中川 正)